

国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究
－エイジング・イン・プレイスにむけて－
Japanese Literature Review of “Ibasyo” for Elderly People:
For “Aging in Place”

上野佳代

(千葉県立保健医療大学健康科学部)

菊池和美

(帝京平成大学健康メディカル学部)

長田久雄

(桜美林大学大学院老年学研究科)

要旨

本研究は、高齢者における居場所の研究の動向と課題を明らかにすることを目的とした国内における文献研究である。文献の検索は、医学中央雑誌Web版、社会老年学文献データベースDialを用いて、検索のキーワードを「高齢者」「居場所」とした原著論文、対象文献は59件であった。研究方法は、高齢者の居場所の研究における「研究の動向」「研究方法」「研究における居場所の位置づけ」「高齢者の居場所の認識や概念」について文献の分類及び整理を行い高齢者における居場所の認識の特徴と研究の課題を考察した。

国内文献における高齢者の居場所の認識は、物理的居場所、社会的居場所、心理的居場所が認識されていたが、明確な居場所の定義はされていなかった。今後の研究課題は、地域の一般高齢者を対象とした研究、研究方法では縦断研究、既存の心理的居場所尺度の高齢者への活用の可能性の検討、時系列でみた心理的居場所の認識の研究の蓄積が必要であることが示唆された。

キーワード 高齢者, 居場所, 地域居住, 居住継続, エイジング・イン・プレイス

1. 緒言

厚生労働省(2013)¹⁾における介護予防・日常生活支援総合事業(以後 総合事業と称する)の基本的考え方とした地域包括システム実現に向けての提言に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるように、地域包括ケアシステムの構築を実現することが目標として挙げられており、地域で暮らす人々を支える仕組みやその拠点の在り方の検討は重要な課題である。

近年、地域における居住の継続が重要視され、エイジング・イン・プレイス²⁾が推進されている。我が国におけるエイジング・イン・プレイス実現に向けての課題として、「高齢者を支えるための保険外のサービスの確保」があり、高齢者自身に保険外サービス提供者の一員として関与してもらう仕組み作りが必要であること、介護予防に寄与する拠点の在り方として、互助・共助のしくみづくりが必要¹⁾と述べられている。公的（フォーマル）な居場所や、ボランティアや地域住民が参画する取り組みや居場所がどのようになされているのか、介護予防の拠点が、高齢者が利用の選択をする居場所の一つとしてどのように認識されているか、その在り方について正確に把握することは重要であると考えられる。

「居場所」ということばや概念、認識は様々であり、研究においても明確な定義づけが十分行われていないという指摘がある^{3) 4) 5) 6)}。まず、広辞苑⁷⁾によると、居場所とは、「いるところ、いどころ」とある。辞書において、居場所の定義は2000年代以前では、物理的な側面が記載されていたが、2000年以降の辞典には、「身を落ち着ける場所」など心理的な側面も定義されるようになった⁸⁾。子どもの研究において、いじめや自殺、不登校など心の居場所が取り上げられるようになり、子どもを対象とした居場所の研究は、2000年以降集積され、子どもや青少年の居場所の概念は明確にされてきた⁴⁾。教育学辞典⁹⁾によると、「生活者として身を置く居所である。家庭、学校、地域、職場において、息苦しくない生活を進めるために必要な物理的空間である。」と述べられている。居場所を物理的な空間を意味する他、その人の中にある心理的な意味や人との関係性も含めて居場所と認識されるようになった。高齢者に関する議論において、居場所ということばが用いられるようになったのは、1990年以降といわれている¹⁰⁾。

第20回高齢社会対策会議（内閣府 共生社会政策統括官）¹¹⁾において、「高齢者の居場所と出番（社会的役割）をどう用意するか」という検討課題が提示された。高齢者の居場所の研究において、澤岡³⁾は、「後期高齢期の『居場所創り学』のすすめ」の中で、地域に居場所を創り上げておくことが重要であること、その居場所では、高齢者の経験や知識を活用するなど役割や他者への貢献など、社会全体で高齢期の居場所と出番の在り方を探る必要性を示している。一方、要介護者におけるデイサービス利用の抵抗感の研究¹²⁾では、要介護者である中途障害者や高齢者にとって、【自分にとっての安心できる場所・人・自分に合った生活スタイルとのギャップへの感情】が、介護保険における公的（フォーマル）なサービスであるデイサービスにいかざるを得ない場所と感じ、自ら過ごす場所（居場所）に選択することに抵抗感を抱いていることが明らかにされ、健康障害による支援の必要な高齢者には、地域で過ごしながらかフォーマルだけでなく、インフォーマルな居場所を必要としているという課題を示している。

これらのことから、高齢者における居場所がどのように認識されているのかその概念や構成要素について整理し、明確にすることは、健康や障壁に関係なく、地域で暮らす高齢者を支える拠点として高齢者当事者の視点を活用するための手がかりとなり得る意義があると考えた。本研究では、我が国の文献における、高齢者の居場所についての認識の特徴を明確にすること、高齢者における居場所の研究における問題や課題の示唆を得ることを目的とした。

2. 研究方法

1) 分析対象文献の選定

(1) 第1段階

医学中央雑誌WEB版および社会老年学文献データベースDialを用いて、「居場所」と「高齢者」をキーワードとし、「原著論文」、研究年度の期間は限定しないで検索した(2017年9月6日)。得られた論文は、医学中央雑誌Web版による文献では、87件であった。社会老年学文献データベースDialは論文形態(原著論文)の検索はない。したがって「高齢者」「居場所」として得られた文献22件から、調査研究、事例研究など研究手法をとられている文献20件を選択し、そのうち医学中央雑誌Web版と重複する文献9件を除き11件を選択した。

以上により、得られた文献は98件であった。なお、研究年度の期間については、高齢者に関する居場所ということばが用いられるようになったのは、1990年以降である⁶⁾ことをふまえ、介護保険(2000年以降)以前の研究も含め、期間を限定しない選択とした。

(2) 第2段階

高齢者自身の居場所についての文献に限定した。抄録、本文を精読したところ、青少年や成人期を含む年齢が混在している居場所の文献が29件あった。また、高齢者の家族・介護者における居場所についての文献が8件、高齢者自身の居場所について記載されていない文献2件がみられた。本研究では、高齢者自身の「居場所」の認識について記載のある文献に限定することにした。

次に、高齢者の居場所については、ケアスタッフからみた高齢者の居場所や高齢者と子どもとの関係について様々な角度から論じられていた。此处では、高齢者自身の「居場所」がどのように認識されているのかについて記載がされていれば誰からみた認識であるかについては限定しないことにした。

以上、第1段階、第2段階の選択を経て得られた59件を分析対象文献とした。

2) 分析方法

分析対象文献を「高齢者の居場所の研究の動向」「高齢者の居場所の研究方法」「研究における居場所の位置づけ(説明変数, 目的変数)」「高齢者の居場所の認識や概念」の視点で分類・整理を行い、高齢者における居場所の認識の特徴と研究課題を考察した。

3. 結果

1) 高齢者における居場所の研究の動向(表1)

高齢者の居場所の研究における1994年～2017年の59件の結果である。発表された研究の年毎の件数と、5年ごとの件数を整理した(表1)。発表された年別をみると、1994年から2017年では、年間1件から7件の研究がされていた。一番多数であったのは、2014年の7件であった。

5年毎の件数をみると、1994から1999年では3件、2000から2004年では16件、2005から2009年では17件、2010から2014年では16件、2015年以降では10件の研究がみられた。2000年以降増加し、その後、同程度数の研究が行われていた。

どのような高齢者の居場所の認識についてみているのか、高齢者の健康状態や、要介護状態等の経年的な経過をみると、1994年当初から2017年現在まで、脳梗塞や神経難病等による中途障害、うつ病や老年期せん妄、統合失調症などの精神疾患、軽度認知症およびアルツハイマー型認知症などの健康障害を有する高齢者や、要介護認定を受けている高齢者の研究が散見されていたが、2007年以降、介護予防の対象となる高齢者や元気な高齢者^{34) 72)}、退職後的高齢者⁵³⁾の居場所の認識をみた研究がみられた。

次に、いずれの場所を居場所と認識した研究がみられているのか研究動向を見ると、病院や介護老人保健施設などを居場所と認識された研究が散見される中、2008年以降、介護予防拠点を利用する高齢者³⁹⁾や、軽度認知症高齢者⁴⁵⁾における自宅から行くデイプログラムの居場所の研究がみられていた。更に、2015年以降には、自宅から参加できる自主グループが行う居場所⁶⁵⁾や、ボランティア活動をしている地域高齢者による居場所のあり方をみる研究がされていた。

表1. 高齢者の居場所の研究の件数

発表された年	件数計 (n: 59)		
	1994	1	
1994～99	1995	1	3
	1999	1	
	2000	2	
2000～04	2001	5	12
	2002	3	
	2003	1	
	2004	1	
	2005	2	
2005～09	2006	4	17
	2007	2	
	2008	6	
	2009	3	
2010～14	2010	3	19
	2011	5	
	2012	2	
	2013	2	
	2014	7	
2015～17	2015	2	8
	2016	3	
	2017	3	

2) 高齢者の居場所における研究方法 (表2)

研究方法では、事例研究29件、質的記述的研究17件、実態調査研究11件、実証的研究1件、ミックスメソッドによる研究が1件であった。分析方法では、質的記述的研究における分析方法は、質的帰納法、ライフヒストリー、M-GTA、エスノグラフィーによる行動観察法などであった。実態調査研究では、居る場所や過ごしている場所を居場所の経時的変化の実態調査や、実証的研究では、フォーカスグループインタビューによるものであった。横断研究がほとんどであり、縦断研究で検討された研究は1件⁴⁵⁾であった。居場所の尺度開発をした研究は、高齢者の居場所を限定とした本研究における研究ではみられなかった。

3) 研究における居場所の位置づけ (説明変数, 目的変数) (表2)

研究における居場所の位置づけとして、居場所が説明変数あるいは、目的変数(結果)について整理した。居場所を説明変数として位置付けられた研究では、事例研究が多く居場所を結果として位置付けられた研究がほとんどであった。高齢者の居場所を目的変数として位置付けられた研究は、高齢者のQOLが、生活の居場所の変化が影響する結果を示された研究¹³⁾居場所の安心感と意欲と関連をみた研究⁶⁸⁾であった。

表2. 高齢者の居場所の研究における居場所の位置づけ

文献	場所	高齢者の特徴 (健康状態・要介護状態の 有無など)	研究方法	研究における居場所の位置づけ (説明変数or目的変数(結果))
高橋他13) (1994)	自宅	高齢糖尿病患者	実証的研究 ランダムサンプリング比較研究	高齢者のQOLは、生活の場(居場所)の変化が影響(目的変数)
小山14) (1995)	介護老人福祉施設	—	質的記述的研究 (参与観察・半構成的面接)	施設内の自分の居場所(結果)
板谷他15) (1999)	認知症施設	痴呆(認知症)	事例研究	自分の居場所を探す(結果)
林16) (2000)	介護老人保健施設	—	事例研究	心理療法介入(結果)
宮田17) (2000)	介護老人保健施設	施設退所後の要介護高齢者	実態調査研究	1年後の居場所の変化(結果)
宮島他18) (2001)	自宅	なんらかの保健医療福祉サービスを受けている高齢者	質的記述的研究 (半構成的質問紙による面接調査)	過ごしている場所(結果)
野川他19) (2001)	自宅	ALSなど慢性進行性疾患	質的記述的研究	高齢者は居場所のなさを募らせていた(結果)
首藤他20) (2001)	通所リハビリテーション(デイケア)	初老期うつ病	事例研究	デイケア介入(結果)
諏訪21) (2001)	病院	痴呆(認知症)	事例研究 (参加観察)	認知症高齢者の参加観察による「自分の居場所をみつける」(結果)
住吉他22) (2001)	介護老人保健施設	痴呆(認知症)	事例研究 (行動観察)	居場所と満足度(一定の対象者の表情や言動で評価)の関係(目的変数)
小林23) (2002)	病院	脳梗塞	事例研究	自宅復帰のために家庭内での本人の「居場所」を確保(結果)
亀谷他24) (2002)	介護老人福祉施設	認知症	事例研究	施設内での居場所(結果)
峯尾他25) (2002)	ユニット型施設	痴呆(認知症)	事例研究	居場所作り(介入方法)

文献	場所	高齢者の特徴 (健康状態・要介護状態の 有無など)	研究方法	研究における居場所の位置づけ (説明変数or目的変数(結果))
大川一郎26) (2003)	自宅	認知症高齢者	事例研究	認知症高齢者の行動の理由と心理的居場所の内容が一致：・落ち着ける場所・安心できる、人や場所・自分の存在を認められる・自分自身の役割を求めている(居場所の要素)
大川嶺子27) (2004)	施設入所中の高齢者の故郷訪問(逆デイサービス)	要介護1～5高齢者	実態調査研究	逆デイサービスは地域の中の居場所(結果)
梅田他28) (2005)	病院	大腿骨頸部骨折術後	事例研究	病院が居場所でない(結果)
大森29) (2005)	自宅	心疾患、糖尿病等 前期高齢者女性	質的記述的研究 (M-GTA)	家族以外の交流関係から得られる特徴(結果)
沖中30) (2006)	介護老人保健施設	身体障害者	質的記述的研究 (ライフヒストリー)	高齢者の自己意識インタビューから得た支援示唆に居場所がある(結果)
荻野他31) (2006)	介護老人保健施設	認知症で睡眠障害のある 高齢者	事例研究	居場所(過ごしている場所)の照度は睡眠に影響している(目的変数)
大山32) (2006)	病院	老年期せん妄・認知症	事例研究	居場所がわからない認知症の症状(結果)
三好他33) (2006)	認知症療養病棟	長期療養が必要な 認知症高齢者	事例研究	ユニットケア導入(結果)
浜崎他34) (2007)	自宅	老人大学校同窓会 会員である高齢者	実態調査研究(自記 式質問紙調査)	抑うつ得点(Zung)とセルフ・エフィカシー得点との関連(目的変数)
菅原35) (2007)	病院	認知症、警戒的・拒否的な 高齢者	事例研究	認知症警戒・拒否的態度の原因が自分の居場所探し(結果)
久津見36) (2008)	介護老人保健施設、 介護老人福祉施設、 介護療養型医療施設、 認知症対応型共同生活介護	BPSDを有する認知症 高齢者	質的記述的研究	認知症によるBPSDは居場所の安寧を脅かす(結果)
植村他37) (2008)	介護老人保健施設	在宅復帰を目指す高齢者	質的記述的研究	施設入所における安心できる居場所(結果)
小楠38) (2008)	病院から施設へ転院	在宅復帰を目指す 高齢者	質的記述的研究	退院移行における「自分の居場所のない辛さ」(結果)
笠井他39) (2008)	介護予防拠点施設	認知障害がなく会話が可能、 自宅から介護予防拠点利用	質的記述的研究	介護予防拠点施設利用により自分の居場所を見いだせる(結果)
沖中40) (2008)	農村部介護老人保健 施設入所	身体障害を有する農村部 の施設入所高齢者	質的記述的研究	老いの意識の変化の中に「自分の居場所」を見出す(結果)
伊藤他41) (2008)	介護老人福祉施設	要介護高齢者	質的記述的研究 (半構造化面接)	デイケアプログラムにおける結果
柴原42) (2009)	通所サービス(デイ ケア・デイサービス)	要介護高齢者	事例研究	デイサービスの効果：豊かな居場所感・個人の存在感、役割・社会活動、疎外感・自尊心(結果)
大和43) (2009)	病院	脱水患者	事例研究	居る場所(結果)
藪内他44) (2009)	病院認知症病棟	認知症高齢者	事例研究	介入後に個室での援助(居場所)により心地よい感覚、安心感がえられる(結果) 認知症行動障害スケール(DBDS)施行前中後得点の減少
亀井他45) (2010)	自宅から行く多世代 交流デイプログラム	65歳以上軽度認知症	縦断的研究(12か月の 効果)とエスノグラフィによる観察の ミックスメソッド)	GDS-15の効果(低下)QOLの主効果、 参加観察の結果：高齢者はいつも同じ 席に座る等
堀内46) (2010)	病院、認知症デイ ケア	認知症	質的記述的研究 (半構造化面接)	デイケアの場における変化(結果)
小林47) (2010)	介護付き有料老人 ホーム	ホームへ早めの住み替え 後の高齢者情緒的支援	質的記述的研究 (半構造化面接)	居場所をつくる(介入方法)
吉川48) (2011)	施設入所	妄想心理症状のある高齢 者に関わるケアスタッフ から見た高齢者	実態調査研究	妄想心理症状のある時、どこに居るか (結果)

文献	場所	高齢者の特徴 (健康状態・要介護状態の 有無など)	研究方法	研究における居場所の位置づけ (説明変数or目的変数(結果))
白石他49) (2011)	病院	高齢統合失調症	事例研究	精神疾患の高齢者の利用している居場所やサービスの移行の困難さ(結果)
宋他50) (2011)	病院	高齢統合失調症	事例研究	居る場所(介入方法)
大宮他51) (2011)	介護老人保健施設	平均要介護度3.4	実態調査研究	居場所の変化(結果)
中島他52) (2011)	大規模住宅開発された勤労退職者の居る住宅	元気な高齢者	実証的研究 (フォーカスグループインタビュー)	居場所づくりの方法の抽出 小領域で居場所創り 活動の担い手ボランティアの確保
種橋53) (2012)	介護老人福祉施設	認知症高齢者とかわるケアスタッフからみた寝たきり高齢者	質的記述的研究	介入により居場所が得られる(結果)
松原他54) (2012)	介護老人福祉施設	認知症・統合失調症	事例研究 (24時間の場所変化調査)	居る場所の変化(結果), 居場所ができる と幻聴が減少(原因)
田原他55) (2013)	介護老人保健施設	90歳台 後期高齢者	質的記述的研究 (質的帰納法)	老いを受け入れ(心理的居場所), 過ごす場所(居場所)を選択している (結果)
吉川56) (2013)	自宅	認知症高齢者	事例研究 (グループ回想法)	居場所創り(結果)
長澤57) (2014)	老人保健施設 (デイケア)	認知症以外, 要介護高齢者	事例研究	デイケアの場における変化(結果)
大宮他58) (2014)	医療療養病棟	施設入所高齢者	実態調査研究 (行動観察)	居る場所の変化(結果)
野中他59) (2014)	長期入院	統合失調症	事例研究	入院中のリハビリテーションプログラムの 効果(結果)
酒井60) (2014)	デイナイトケア	高齢アルコール依存症の高齢者	事例研究	デイナイトケアの効果(結果)
加藤他61) (2014)	デイケア	帰宅願望のある 認知症80歳台 要介護男性	事例研究	介入による居心地の良い場所 居場所である仕事場(結果)
宮崎62) (2014)	共生型施設	従来型, 富山型アイサー ビスの事業者	実態調査研究 (比較検討)	地域福祉の拠点になり得る居場所になるのか?(結果)
藤田他63) (2014)	長期療養病院	アルツハイマー型認知症 90歳台女性 要支援1	事例研究	作業療法における介入(結果)
大嶋他64) (2015)	自宅から参加している生活自主グループ	80歳台男性独居高齢者2 例	事例研究	自主グループの参加による心の拠り所 居場所(結果)
牛若他65) (2015)	通所リハビリ	80歳台後半脳梗塞	事例研究	介入による心地よい居場所(結果)
中村他66) (2016)	自宅	ボランティア活動をしている地域住民	実態調査研究	居場所における介入方法のありかた
福岡他67) (2016)	ケアハウス	ケアハウスに入居している自立もしくは要支援の65歳以上の高齢者	質的記述的研究	子どもとの交流における変化(結果)
山下68) (2016)	特別養護老人ホーム	車いす自走が可能で会話による意思疎通の可能な高齢者	実態調査研究(質問紙による他記式面接による)	居場所の安心感が, 意欲と関連 (目的変数)
丸山他69) (2017)	介護老人保健施設	入所者平均年齢87.2歳	事例研究	居る場所(結果)
工藤他70) (2017)	自宅	青森県内の居宅介護支援事業所データ	実態調査研究	居場所と要介護状態の経時的変化 (結果)
古川他71) (2017)	自宅	単身軽度認知機能障害のある70歳台男性	質的記述的研究 (ライフヒストリー)	居る場所(結果)

4) 高齢者の居場所の認識や概念 (表3)

国内における高齢者の居場所における59件の対象の研究において、記載されている居場所の認識を概観した。物理的環境を居場所と認識された物理的居場所、人とのつながりや役割が得られるなど、人との関係やつながりを持てる場所を居場所と認識されている社会的居場所、高齢者が感じている居心地や心の拠り所と認識された心理的居場所がみられた。

具体的な研究の件数は、物理的居場所として認識された研究が54件、心理的居場所として記載され研究が36件、社会的居場所の研究は、32件であった。更に、物理的居場所のみ認識された文献は14件、心理的居場所のみの文献が、2件、社会的居場所の研究は、2件であった。物理的居場所&社会的居場所の文献は7件、物理的居場所&心理的居場所が11件、心理的&社会的居場所1件であった。物理的居場所&心理的居場所&社会的居場所の認識をすべて含む研究は、22件であった。

表3. 国内文献における高齢者における居場所の認識 (n: 59)

居場所の認識の要素	件数	文献No.
物理的居場所	14	17) 18) 27) 28) 31) 36) 43) 48) 50) 51) 58) 69) 70) 71)
心理的居場所	2	15) 16)
社会的居場所	2	53) 66)
物理的居場所・心理的居場所	11	14) 19) 23) 37) 38) 39) 44) 47) 59) 64) 65)
物理的居場所・社会的居場所	7	13) 24) 42) 45) 49) 52) 54)
心理的居場所・社会的居場所	1	29)
物理的居場所・心理的居場所・社会的居場所	22	20) 21) 22) 25) 26) 30) 32) 33) 34) 35) 40) 41) 46) 55) 56) 57) 60) 61) 62) 63) 67) 68)

物理的居場所では、高齢者の居場所として認識されている場所には、高齢者が居住している自宅や、介護老人福祉施設を居場所と認識されている研究、病院や介護老人保健施設^{17) 18) 43)}、通所介護施設、地域の介護予防拠点や大学を居場所と認識されている研究が散見された。高齢者の転居等(リロケーション)の点においては、施設入所における環境の変化³⁷⁾において、物理的環境内での居心地や安心感の認識がされていた。同様に、退院後の生活の場を決定する場に高齢者の意思が反映されず、「自分の居場所の不安定さ」「居場所のない辛さ」と認識されている研究もあり、居住場所の変化が生じた時の高齢者の心理的なありようが同時に認識されていた。物理的居場所と心理的居場所が関連し合って認識されていた。

心理的居場所では、自分の居場所で自分を守り保つ¹⁵⁾、心理的安寧に近づく¹⁶⁾自分の存在感と認識されていた。自分がそこに居てもいい場、そこにいてもいいと認知し得る感覚、大切にされる感覚⁴⁴⁾と認識されていたのは、認知症高齢者における居場所の認識による研究であった。認知症高齢者は、居場所の認識の内容は、なじみ、安心、居心地の良い、家庭的、馴染む場所と認識され、施設内での落ち着いた居場所を探す¹⁴⁾あるいは、居場所がなく落ち着かないことや、施設内での認知症高齢者にとっては、BPSDは居場所の安寧を脅かす³⁶⁾など、認知症高齢者間が

心理的安寧に影響し合うことが認識されていた。一方、自分の居場所を「過去・現在・未来をとおしてその人が身を置くべきだと感じている場所」と連続した時間の中での居場所を認識されていた¹⁹⁾。それは、神経難病の高齢者の心理的居場所の認識ではあるが、個人的居場所としても認識されていた。

次に社会的居場所では、介護老人保健施設などの通所介護（デイサービス・デイナイトケア）、地域の介護予防拠点や大学や子どもとのふれあいのある場所など、高齢者が日中を過ごす場所を社会的居場所と認識されていた。また、統合失調症の高齢期移行後の活動場所を高齢期移行後の居場所⁵⁰⁾として認識されていた。社会的居場所については、他者との関わりや役割をもつ場所と認識され、馴染みの人 距離感を保つ⁴¹⁾など、人との関係の距離も居場所の認識に含まれていた。高齢者が子どもの居場所を作るなど、世代間交流の場所が高齢者や子ども両者の居場所となることが認識されていた⁴⁵⁾。

一方、地域のコミュニティを地域の中の居場所の認識がされていたのは、元気な高齢者や介護予防の必要な高齢者への活動の場所であった^{53) 65) 73)}。地域におけるフォーマルケアとインフォーマルケアの取り組みでは、課題として小地域ごとの居場所づくりや、高齢者の「居場所」や「出番づくり」⁶⁷⁾が必要とされ、地域の拠点としての社会的居場所として認識されていた。

さらには、高齢者が、その場所を居場所と感ずるためには、「自分が必要とされること」「自分がそこを必要とする」という居場所の条件が認識されていた²⁶⁾。

高齢者が望む居場所はどこかという記載のされた文献はみられなかったが、家族の中で居場所を失い、家族以外の同世代の交流を、自分の居場所と認識されていたのは、地域の元気な高齢者による研究であった。また、退院移行時に高齢者自身が「自分の居場所のない辛さ」³⁸⁾と認識していた背景に高齢者と家族には、望む居場所の異なりが生じている可能性が示されていた。

4. 考察

国内における高齢者を対象とした研究の動向、研究方法、居場所の認識から、研究の課題を考察する。

1) 高齢者における居場所の研究の動向からみた研究課題

まず、研究の動向として、1994年から2017年における高齢者の居場所の研究を概観すると、高齢者の居場所の研究は、公的な制度や社会の動向が影響していると考えられた。まず、2000年以降、高齢者の居場所の研究件数が増え、継続的にされているといえた。高齢者の特徴として、脳梗塞や精神疾患を有する高齢者や、要介護認定を受けた高齢者、認知症高齢者が、過ごしている施設や病院を居場所として認識された研究がされていると考えられた。具体的には、高齢者の居場所の経年的変化や、その場所における居心地や安心感を得るための研究が散見され、介護保険制度の開始や制度の変遷に関連した高齢者の居場所の研究がされていることが推察された。2008年以降、自宅から利用するための地域の居場所の必要性について言及がされている。

たとえば、地域で生活しながらアルコール依存症の治療の場所として、あるいは、脳梗塞や、神経難病、精神疾患、認知症などを有する高齢者が参加できる場所を居場所と認識された研究など、疾患や障害を有する要介護状態あるいは介護予防の必要な高齢者に着目された、地域における居場所の研究が散見されていると考えられ、介護予防の取り組みの重要性が指摘されていることに起因していると考えられた。

自助・互助・共助という視点について、2016年以降には、自主グループが行う居場所⁶⁴⁾や、ボランティア活動をしている地域高齢者による居場所のあり方をみる研究に、言及がされている。2015年総合事業開始に影響し、事業や研究がされていると考えられた。菊池他は、リハビリテーションの立場から、公的機関と協力し介護予防サポーター講座を行い、介護予防のサポーターが地域で人のために活躍をしたいという互助の推進への関心について考察している⁷²⁾。自助の取り組みでは、独居男性高齢者における自主グループの取り組みがあり⁷³⁾。自助・互助における取り組みにおける共通した課題は、参加の活動継続についてであった。居場所を利用する高齢者とその場所を運営に携わるボランティアの活動の継続と高齢者の居場所の利用の継続と居場所の認識が関係する可能性は論じられていない。その場所が、心理的居場所になれば継続できるというように物理的居場所が社会的居場所として存在し、心理的居場所になる可能性は新たな研究課題であると考えられる。

更に、住民主体の介護予防に向けた取り組みの充実や保健医療福祉関係職の介入の重要性の指摘がある⁶²⁾。すなわち、介護予防の取り組みの場が、高齢者が住み慣れた地域で子どもから高齢者まで暮らし続けるために重要であると考えられていた。この研究は、子どもから高齢者、障壁に関係なく、参加できる「富山デイサービス」という取り組みである。

公益社団法人認知症の人と家族の会における「認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書(2013)」⁷⁴⁾によると、カフェ開設動機別に整理され認知症の人と家族が集う場所の他、地域住民が集うまちの居場所や、既存形態にない個人や医療・介護専門職がかかわる場所があることを指摘されている。加えて、地域の災害拠点という意味においては、H8年阪神淡路大震災後に厚労省委託よりはじまったまちの保健室の取り組みが、その後、訪問看護ステーションや、運営の異なる暮らしの保健室開室が全国で広がりを見せており^{75) 76) 77)}、高齢者の居場所として機能をしている場所のひとつである。地域における高齢者が利用すると想定される居場所の研究については、フォーマル、インフォーマル⁷⁹⁾な居場所における自助・共助・公助という点で運営の違いや、その場所にいる保健医療福祉専門職を含めたボランティアの有無による居場所のあり方についても融合していくことが求められるといえた。

そこで、重要な点は、このような、地域における居場所については、認知症カフェや健康カフェ、まちの暮らしの保健室など、様々な場所での取り組みが存在するにもかかわらず、研究的には、乖離している可能性がある。また、地域における取り組みは、研究手法がとられていない事業紹介として集積されてきている⁷⁸⁾ことが考えられた。今後は、アクションリサーチ法等による、研究の蓄積が期待される。

さらには、一般高齢者の居場所の認識やその取り組みについては、退職後の高齢者⁵³⁾の居場

所の認識の研究や取り組みが紹介はされつつあるが本研究による研究からは多くはみられなかった。「居場所」に近いと考えられる概念として、アメリカの社会学者Oldenburgによる「サード・プレイス (Third place) がある。日本においては第1の居場所 (家庭)、第2の居場所 (学校や職場)、第3の居場所 (定年後、子育て後の地域等) と分類され、高齢者においては、定年退職後における第3の居場所として表現されており^{80) 81)}、定年退職後の居場所の必要性が論じられている。自宅から利用する定年退職後の高齢者や、一般高齢者が利用する居場所の認識や必要要素については、今後の研究課題となると考えられた。

2) 高齢者の居場所の研究方法与課題

研究方法において、事例や介入研究が多く、介入によって、高齢者におけるどのような居場所となったかを観る研究が多かった。研究における居場所の位置づけとして、居場所が説明変数あるいは、目的変数 (結果) について整理したところ、事例研究が多く目的変数すなわち、居場所を結果として位置付けられた研究がほとんどであり、居場所を説明変数とした実態調査や縦断研究はほとんどなかった。唯一されていたのは、今居る場所の経時的変化と要介護状態の関係を観るものであり、物理的居場所を説明変数とするものであった。この結果が意味することは、高齢者の居場所の此処それぞれの定義づけがされていないことに起因すると考えられた。したがって、高齢者における居場所の認識、物理的居場所、心理的居場所、社会的居場所が定義されることで、今後、高齢者の居場所の認識を説明変数とした研究、たとえば、高齢者の地域における居場所のどのような認識が、高齢者にとって健康やよりよい生活に寄与するのかについて検討することが可能となると考えられた。高齢者の居場所の尺度開発をする研究についても高齢者のみを対象とした研究はみられなかった。子どもや、精神疾患の人を対象とした心理的居場所における尺度は、開発されておりその活用の可能性は課題であると推察された。

3) 高齢者の居場所の認識における研究課題

高齢者の居場所について、用語の定義は明確になされていない研究が多くみられた。澤岡⁸²⁾は、「第三の居場所」と表現し、居心地の良い、楽しい、やりがいがあるなど個々の価値観が反映された社会活動や人間関係との交流の場や時間を表していることを示している。今回得られた文献においては、高齢者における居場所の認識については、物理的に過ごしている場所と、人とのかかわりや過ごす時間、其処に居て感じる居心地などの気もちを含めた認識がされていると考えられた。居場所の研究における定義は、青少年の研究に始まり、心理学的視点である空間・時間・人間関係も含めた居場所の定義がされてきた。子どもや青少年の居場所の認識においても、物理的居場所、心理的居場所の他、個人的居場所、社会的居場所が認識されおり⁴⁾ 高齢者の居場所の認識と一致しているといえた。

しかしながら、高齢者における居場所の認識では、物理的居場所、個人的居場所、心理的居場所、社会的居場所における此処それぞれについての明確な定義や、構成する因子については、ほとんど論じられていないと考えられた。高齢者における物理的居場所、心理的居場所、社会

的居場所の構成内容の明確化が必要であると考えられた。

高齢者における居場所感尺度の研究は、高齢者に限定した今回の研究の分析対象とされなかったが、高齢者を含む統合失調症を対象とした研究では、【他者と深いかかわりを感じる場】【ありのままの自分でいられる場】【自己を作る場】3因子の信頼性妥当性が示されている^{83) 84)}。この尺度は、高齢者の特徴を考慮した検討が未だされていない。認知症を有する高齢者は、精神的不安定がきっかけで症状や行動に影響することから、統合失調症の人に使用されている居場所感の尺度における精神的安寧は認知症高齢者に活用ができる可能性がある。加えて、高齢者が過ごす地域、在宅、病院、施設などの居場所においても、心理的居場所を得るための評価の視点として活用できる可能性があると推察された。

他方、居場所の認識において、心理的な居場所の認識は、安心感や居心地が形成されるという点で、直ぐに認識されるわけではなく、物理的居場所を基盤として、人とのつながりなどの社会的居場所における時間の経過の中で認識されると考えられた(図1)。神経難病の高齢者が、過去、現在、未来と居場所を時間軸で認識したこともふまえ、居場所の認識が得られるプロセスを時間の経過とともに変化する現象として検討するなど、時系列に検討していくことは今後の研究課題と考えられた。

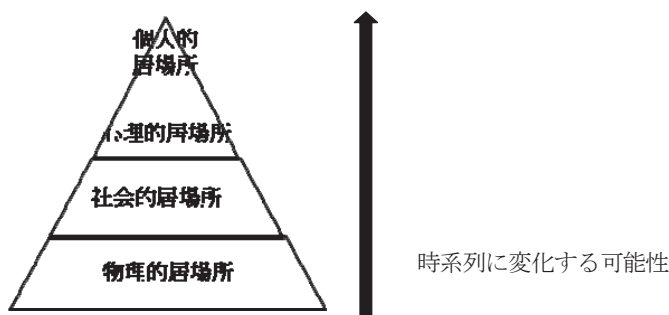


図1. 高齢者の居場所の認識の構造

大川²⁶⁾は、「高齢者の居場所は、『相手から必要とされる』、『自分がそこを必要とする』ことである。」と述べている。高齢者の居場所の認識の特徴として、高齢者は、高齢者自身の健康上の変化や、配偶者の死別などライフイベントによる変化が生じることをふまえると、子どもや青少年の居場所の認識とは異なり、高齢者自身が自ら必要と考える居場所の選択や、その場所が、高齢者の役割や人とのつながりが重要な要因である可能性があり、今後の研究課題となることが示唆された。

5. 研究の限界と課題

本研究では、我が国における高齢者の居場所の認識の特徴と研究課題を明らかにすることを目的とした。分析した研究についてみると、地域における高齢者の居場所を想定した居住継続に関連すると考えられる拠点について、すべての分野の国内文献を網羅したとはいえ限界がある。

さらに、エイジング・イン・プレイスが推進される中、高齢者における居場所を地域の拠点として位置づけるために、海外の研究における文献もレビューし、我が国の居場所の認識の定義がされることが課題である。

謝辞

本研究は、2013年日本老年社会科学学会学術集会（示説）で発表をした内容に、医学中央雑誌に社会老年学の文献を加え、再検討をした研究である。分析過程において帝京平成大学 菊池和美氏にご協力いただきました。また、桜美林大学大学院長田久雄教授にご指導を賜りました。深謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省老健局 (2013)；介護予防・日常生活支援総合事業の基本的考え方
- 2) 松岡洋子 (2011)；エイジング・イン・プレイス（地域居住）と高齢者住宅 日本とデンマークの実証的比較研究, (株)新評論
- 3) 澤岡詩野 (2013)；後期高齢期の「居場所創り学」のすすめ - サードライフへの軟着陸のために, 生活福祉研究, 83: 1-12
- 4) 石本雄真 (2009)；居場所の概念の普及及びその研究と課題, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 3(1)：93-100
- 5) 上野佳代, 菊池和美, 長田久雄 (2013)；高齢者を対象とした居場所の研究の実態とその課題（示説）, 老年社会科学35(2)：274
- 6) 中村美智代 (2017)；高齢者の居場所研究の動向と課題, 甲子園短期大学紀要, 17-22
- 7) 広辞苑第5版 (1998), (株)岩波書店
- 8) 中島喜代子他 (2007)；「居場所」概念の検討, 三重大学教育学研究紀要, 58：77-97
- 9) 教育用語事典 (2003)；ミネルヴァ書房
- 10) 工藤禎子 (1994)；寒冷広域地域における高齢者の死亡前1年間の居場所の変化, 日本看護科学会誌, 14(3)：264-265
- 11) 内閣府「平成23年度高齢者の居場所と出番に関する事例調査」(2012)
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h23/kenkyu/zentai/index.html>
- 12) 上野佳代 (2012)；要介護者とその家族のデイサービスに対する抵抗感の研究, 老年学雑誌, 2：57-71
- 13) 高橋龍太郎他 (1994)；地域で生活する高齢糖尿病患者の生活実態の比較分析, 日本老年医学会

- 雑誌, 31 (5) : 404-410
- 14) 小山幸代 (1995) ; 入居者の生活体験に基づく特別養護老人ホームの生活内容の検討, 高齢者のケアと行動科学, 2 : 77-86
 - 15) 板谷裕子他 (1999) ; 専門職に従事していたアルツハイマー痴呆性老人への援助事例, 高齢者のケアと行動科学, 6 : 34-43
 - 16) 林智一 (2000) ; 老人保健施設における心理療法的接近の試み 長期入所の高齢期の心理面接過程から, 心理臨床学研究, 18 (1) : 58-68
 - 17) 宮田香織 (2000) ; 大都市近郊にある老人保健施設入所者の家庭退所後の在宅生活継続に関連する要因について, 日本老年医学会雑誌, 37 (11) : 928-936
 - 18) 宮島朝子他 (2001) ; 在宅療養者の居住環境と療養生活との関連 12名の事例分析から, 日本家政学会誌, 52 (5) : 451-461
 - 19) 野川道子他 (2001) ; 進行性筋萎縮症患者の病の受け止めに影響する要因, 日本難病看護学会誌, 5 (3) : 185-192
 - 20) 首藤真理子他 (2001) ; 初老期うつ患者に対するデイケア効果, 臨床看護, 27 (11) : 1700-1704
 - 21) 諏訪さゆり (2001) ; 痴呆性高齢者の言動の意味の分析 その人らしさを尊重したケア技術確立に向けて, 東京女子医科大学看護学部紀要, 4 : 11-18
 - 22) 住吉和子他 (2001) ; 老人保健施設における痴呆老人の満足度調査, 岡山大学医学部保健学科紀要, 12 (1) : 63-70
 - 23) 小林千里 (2002) ; 視床痛と抑うつを呈し, 自殺企図を繰り返して自宅復帰に至らなかった1症例, 理学療法群馬, 13 : p97-100
 - 24) 亀谷美和子他 (2002) ; 多利用者とのトラブル 徘徊, 異食など問題行動の多い痴呆性高齢者の理解とケア, 高齢者のケアと行動科学, 8 (2) : 15-23
 - 25) 峯尾武巳他 (2002) ; ユニット型施設内における人間関係の調整事例, 高齢者のケアと行動科学, 8 (2) : 24-33
 - 26) 大川一郎 (2003) ; 老年期と居場所: その心理的意味, 高齢者のケアと行動科学, 9 (1) : 3-11
 - 27) 大川嶺子他 (2004) ; 沖縄県K島における高齢者の生きがいづくりに関する研究 (第1報) 施設入所者の「ふるさと訪問」から「逆デイサービス」展開への期待, 日本看護学学会論文集 老年看護, 34 : 153-155
 - 28) 梅田広司他 (2005) ; 痴呆性老人の大腿骨頸部骨折術後に対する取り組み 安心できる場を求めて, 地域医療第44回特集号 : 364-366
 - 29) 大森純子 (2005) ; 前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記述的研究 関係性の特徴: 『気遣い合いの日常交流』, 老年社会科学, 27 (3) : 303-313
 - 30) 沖中由美 (2006) ; 身体障害と共においを生きる施設入所高齢者の自己意識, 日本看護科学会誌, 26 (4) : 19-29
 - 31) 荻野悦子他 (2006) ; 睡眠に障害をもつ認知症高齢者の生活の場における光環境の実態とケアの方向性, 日本認知症ケア学会誌, 5 (1) : 9-20
 - 32) 大山司郎他 (2006) ; 当帰芍薬散を使った老年期せん妄の治療, 筑水会神経情報研究所・筑水会病院年報, 24 : 47-49
 - 33) 三好豊子他 (2006) ; 認知症高齢者に対するケアを考える ユニットケアを思考してみえてきた研究, 日本精神科看護学会誌, 49 (1) : 128-129
 - 34) 浜崎優子他 (2007) ; 地方中核都市における高齢者の社会活動と幸福感に関する研究 (第2報) 後期高齢者の主観的幸福感の関連要因, 北陸公衛誌, 33 (2) : 86-91
 - 35) 菅原由美子 (2007) ; 警戒的・拒否的な認知症患者に対する看護 馴染みの人間関係を作り需要と理解をしながらのケアを通して, 日本精神看護学会誌, 50 (2) : 605-608

- 36) 久津見雅美 (2008) ;施設入所認知症高齢者にみられるBPSDケアのための新たな概念の構築：問題行動パラダイムを越えて, 日本看護研究学会雑誌, 31 (1) : 111-120
- 37) 植村真梨他 (2008) ;介護老人保健施設に入所する高齢者の新しい生活環境に対する“承認”の構造, 医学と生物学, 152 (7) : 258-263
- 38) 小楠範子 (2008) ;退院後の生活の場の決定に参加できない高齢者の体験, 老年社会科学, 30 (3) : 404-414
- 39) 笠井恭子他 (2008) ;介護予防拠点施設を継続利用している高齢者の生活と施設における体験, 老年看護学, 13 (1) : 5-12
- 40) 沖中由美 (2008) ;農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識, 鳥根大学医学部紀要, 31 : 37-44
- 41) 伊藤智子他 (2008) ;特別養護老人ホームで生活する高齢者のエンパワーメント支援に関する検討 (第2報) ~ケアスタッフの意識・行動分析, 鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2 : 23-24
- 42) 柴原君江 (2009) ;生活支援における活動・参加の課題と環境因子, 田園調布学園大学紀要, 3 : 1-15
- 43) 大和薫他 (2009) ;高齢者の血管内脱水の治療 間歇性低張液投与療法について, JMC日本慢性期医療協会機関誌, 17 (3) : 78-84
- 44) 藪内佳代子他 (2009) ;認知症疾患における周辺症状の緩和について ヘッドマッサージで得られた心の安らぎ, 日本精神看護学雑誌, 52 (2) : 406-410
- 45) 亀井智子, 糸井和佳, 梶井文子他 (2010) ;都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12カ月間の効果に関する縦断的検証, 老年看護学, 14 (1) : 16-24
- 46) 堀内園子 (2010) ;認知症ケアの専門性 デイケア看護師による認知症高齢者の「脈を掘り当てる関わり」と「磁場」の形成, 日本看護研究学会雑誌, 33 (2) : 35-47
- 47) 小林由美子 (2010) ;介護付き有料老人ホームへの早目の住み替え後の子どもからの情緒的支援居住者の視点による質的検討, 社会福祉学, 51 (2) : 70-82
- 48) 吉川佳耶他 (2011) ;要介護高齢者の妄想的心理症状について, 旭川敬老園利用者の実態調査から, 旭川荘研究年報, 42 (1) : 63-66
- 49) 白石弘巳他 (2011) ;高齢の統合失調症患者と家族の社会的孤立, 老年精神医学雑誌, 22 (8) : 692-698
- 50) 宋敏埒他 (2011) ;高齢者の統合失調症:特徴とその周辺, 老年精神医学雑誌, 22 (8) : 901-90
- 51) 大宮裕子他 (2014) ;療養病床における患者の居場所・姿勢・行為に関する実態調査, 目白大学健康科学研究, 7 : 61-67
- 52) 中島民恵子 (2011) ;地域特性に即したインフォーマル家の実践課題抽出の試み 高齢化が進む大都市郊外の春日井市S地区での調査から, 日本福祉大学社会福祉論集, 125 : 103-119
- 53) 種橋征子 (2012) ;意思疎通困難な寝たきりの高齢者に対する援助の視点, 介護職員との「ケア」の関係性に着目して, 高齢者のケアと行動科学, 17 : 52-63
- 54) 松原里美 (2012) ;認知症患者へのセンター方式を活用した援助 その人らしさを活かすために, 日本精神科看護学術集会誌, 55 (1) : 248-249
- 55) 田原育恵 (2013) ;介護老人福祉施設入所による生活環境変化に適應するための要因 後期高齢者のインタビュー調査より, 聖泉看護学研究, 2 : p59-67
- 56) 吉川桃子 (2013) ;地域在住認知症高齢者の居場所を作る心理臨床学的支援 高齢者間の相互的交流と役割観に着目して, 心理臨床学研究, 31 (4) : 640-650
- 57) 長澤久美子他 (2014) ;高齢者の通所リハビリテーションに対する思いの変化 通所リハビリテーション利用開始時と利用半年後を比較して, せいらい看護学会誌, 4 (2) : 7-13

- 58) 大宮裕子他 (2014) ;療養病床における患者の居場所・姿勢・行為に関する実態調査, 目白大学健康科学研究, 7: 61-67
- 59) 野中真由子他 (2014) ;安心できる居場所を求めて 長期入院患者の退院支援における安心の保証とは, 病院・地域精神医学, 57(1) : 109-112
- 60) 酒井有紗 (2014) ;高齢アルコール依存症者が治療の場から離れないために, 病院・地域精神医学, 57(1) : p118-119
- 61) 加藤明日香他 (2014) ;「ごまかさない」帰宅要求への対応, デイケアを「仕事場」といったA氏の思いを探って, 認知症ケア事例ジャーナル, 7(3) : 270-275
- 62) 宮崎潔 (2014) 「富山デイサービス」が地域の福祉拠点になるための課題と方向性「従来型デイサービス」と「富山型デイサービス」の比較検討から, 共創福祉, 9(2) : 9-18
- 63) 藤田芽奈他 (2014) ;人間作業モデルに基づく活動選択と環境支援が認知症高齢者の周辺症状に有効だった1事例, 作業行動研究, 18(1) : 26-33
- 64) 大嶋佐斗実 (2015) ;独居男性高齢者2事例の自主グループ活動継続理由, 健康意識の高まりと自分の居場所があること, 日本看護学会論文集 在宅看護, 45: 11-14
- 65) 牛若さおり他 (2015) ;楽しめる場所が私の居場所, 福井県作業療法士会学術誌, 2(1) : 8-9
- 66) 中村廣隆他 (2016) ;住民主体の介護予防に向けた取り組み, 地域課題の共有するワークショップを通じて, 東海公衆衛生雑誌, 4(1)
- 67) 福岡理英他 (2016) ;複合施設で生活する高齢者における子どもとの交流の意味, 島根大学医学部紀要, 38: 1-9
- 68) 山下喜代美 (2016) ;特別養護老人ホームで生活リハビリテーションを実施するために必要な支援 車いすの自走に焦点を当てて, 東京福祉大学・大学院紀要, 6(2) : 137-144
- 69) 丸山直子他 (2017) ;当院併設介護老人保健施設入所高齢者における多剤併用の現況報告, 新潟県厚生連医誌, 26(1) : 16-21
- 70) 工藤英明他 (2017) ;在宅要介護高齢者の1年後の居場所と要介護度の変化 青森県内の在宅介護支援事業所データを用いて, 青森県立保健大学雑誌, 17: 37-43
- 71) 古川淳子他 (2017) ;身体疾患と経度認知機能障害のある高齢者の単身での地域生活継続への意思決定へのライフストーリーと専門職者の支援の影響, 日本看護学会論文集精神看護47: 11-14
- 72) 菊池和美, 宮崎幹和, 長田久雄, 上野佳代他 (2016) ;介護予防サロンのサポーター向けブラッシュアップ講座のニーズ (示説), 第11回日本応用老年学会 (大阪)
- 73) 大嶋佐斗実, 沖中由美 (2015) ;独居男子高齢者2事例の自主グループ活動継続理由 健康意識の高まりと自分の居場所があること, 日本看護学会論文集 在宅看護45: 11-14
- 74) 公益社団法人認知症の人と家族の会 (2013) ;認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業報告書
- 75) 秋山正子 (2014) ;つなぐ機能をはぐくんだ「在宅医療連携拠点事業 (実践報告5) 2011～2012年度ステーション「暮らしの保健室で開花した訪問看護の相談機能, 訪問看護と介護19(1) : 47-52
- 76) 連建夫, 澤岡詩野他, 上野佳代 (7番目) (2016) ;荻窪家族プロジェクト物語, 第3章第3節「荻窪暮らしの保健室」: 133-144, 萬書房
- 77) 秋山美紀 (2017) ;コミュニテイヘルスから考える「保健室」という場の力, 訪問看護と介護, 22(4) : 268-269
- 78) 大橋美幸 (2015) ;超高齢社会における地方都市の街づくり, 老年社会科学, 37(1) : 22-27
- 79) 中島民恵子, 田嶋香苗他 (2011) ;地域特性に即したインフォーマルの実践課題抽出の試み 高齢化が進む大都市近郊の春日井市S地区での調査から, 日本福祉大学社会福祉論集125: 103-119

- 80) 忠平美幸訳 レイ・オルデンバーグ (2017) ; サードプレイス, (株) みすず書房
- 81) Oldenburg R (1989) : The Great good place. Da Capo Press, Cambridge, USA
- 82) 澤岡詩野 (2013) ; 地域での居場所創りと高齢者の健康増進, Geriat. Med, 51 (9) : 923-926
- 83) 國方弘子, 茅原路代, 土岐弘美 (2009) ; 精神に病を持つ人の居場所感尺度の検討, 厚生指標, 56 (13) : 40-47
- 84) 國方弘子 (2009) ; 統合失調症者の居場所感尺度の検討, 木村看護教育振興財団看護研究収録16 : 73-82

Japanese Literature Review of “Ibasyo” for Elderly People: For “Aging in Place”

Kayo Ueno

(Ciba Prefectural University of Health Sciences)

Kazumi Kikuchi

(TeikyoHeisei University of health and medical)

Hisao Osada

(Graduate School of Gerontology, JF. Oberlin University)

Keywords: elderly, Ibasho , area residence residence continuation Aging in place

This study aims at finding the trends and problems in the literature published in Japan, dealing which dealt with environment for the elderly, “Ibasho” for elderly people. To search for literature, Medical Central Magazine Web and Dial and the social gerontology documents database, were used. The key words were “the elderly,” and “Ibasho,” resulting in sixty original articles found, which were published from 1994 to 2017.

In order to categorize the found articles, we used the terms: research direction, research methodology, how the authors evaluate “Ibasho”, and recognition and concept of Ibasho held by the elderly. As a result, we found it critical to recognize the specific characteristics of the elderly’s concept of “Ibasho”.

The concepts of “Ibasho” for the elderly, were focused around articles pertaining to, physical, social, and psychological elements. However, there is no clear definitions to classify those elements because the articles seemed to not address ed. That will probably need more research in the future too. As a conclusion holistic research should be done on general elderly people, living outside of the hospital. Furthermore, the possibility of utilizing the already implemented measurement for psychological “Ibasho” for the elderly should be discussed. Viewing and analyzing the issues for developing a more holistic approach to dealing with “Ibasho” for the elderly is imperative.